

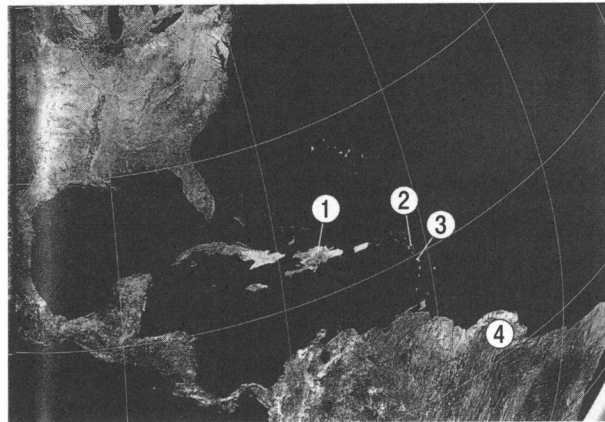
管見「フランス語系クレオール（諸）語」

恒 川 邦 夫

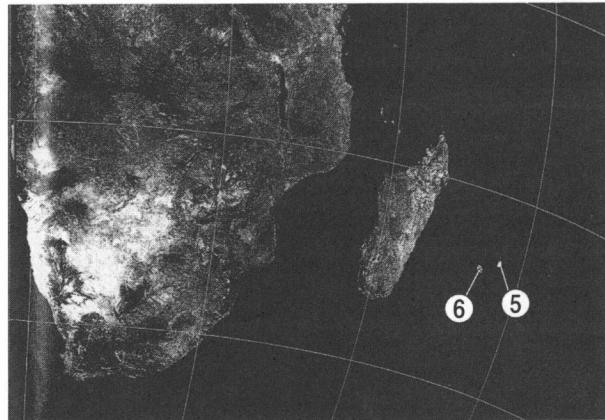
まえがき

本稿の目的は「フランス語系クレオール（諸）語」とはどういう言葉なのかという素朴な問いに対していくらかの知見を披瀝することである。筆者は言語学者ではないので、学問的に筋道のたった仕方で、そうした問いに応えることはできないが、この10年ほどカリブ海やインド洋の「フランス語系クレオール（諸）語」が話されているところ（主として島）へ出かけているので、ブッキッシュな知識ばかりでなく、現地における見聞に基づいた知見の蓄積がいくらかある。そうした蓄積をたよりに、あくまで言語運用の実態を紹介することに焦点を絞って、「フランス語系クレオール（諸）語」の姿を垣間見てもらうのがねらいである。

ポレミックへ足をつっこむことは、専門外のことであり、差し控えたいが、



カリブ海 ①ハイチ ②グアドループ ③マルチニック ④仏領ギアナ



インド洋 ⑤モーリシャス ⑥レユニオン（写真左半分はアフリカ大陸）

そもそも「フランス語系クレオール(諸)語」という呼称そのものがボレミックに満ちた地雷野のようなものであることについて一言だけ述べておきたい。第一に「フランス語系」とはどういうことなのか。フランス語が下敷きになっているということか。ということは広義のフランス語方言の一種と考えてよいのか、カナダのケベック州で話されている言葉(「ケベック方言」québécois)と同じなのか、それならなぜクレオール語と呼ぶのか、地域の名称を取って、「マルチニック方言」「ハイチ方言」等々と呼べばいいではないか。答えは、「フランス語の語彙が中核となって作られている」ので、「フランス語系」というのであって、文法構造などは同列には論じられないというものである。論者によっては、文法構造はアフリカ起源の言語にあり、語彙だけが入れ替えられているのだと主張するだろう。そういう主張がなされるのには理由がある。本論で扱うクレオール語は、すべて、かつて奴隷制を敷いていたプランテーション経済の植民地においてアフリカから連れてこられた奴隷たちの言葉として発達した言語だからである。クレオール語を自らのアイデンティティーに結び付けて考える場合、そこに「主人」の言語の変種を見るのではなく、自らの出自(アフリカ)の言語の骨格を見ようとするのは、科学的根拠の有無とは別の願望のレベルの問題である。この一点だけを論じても、本論の紙幅ではとうてい扱い切れない問題圏に突入することになるだろう。

次に「クレオール(諸)語」というときの言語の複数性の問題である。例えば、《クレオール》というキーワードを世界に発信したマルチニックの学者・作家グループのコンセプトによると、カリブ海の島々とインド洋の島々の間にはフランス語系クレオール語で結ばれた紐帯がある。地理的には何千キロも離れ、物理的な接触は不可能であったにもかかわらず、両地域に発生したフランス語系クレオール語は、何の予備知識がなくても、相互理解が可能なほどの親縁性があり、「クレオールの連帯」は地政学的連帯を超越した新たな紐帯を生み出すものだと呼称されている⁽¹⁾。かくして打ち出された「クレオール諸島連合」Banzilkreyol (=Bande des Iles créoles) というスローガンは一種の合言葉となり、両地域間の人的交流の糸口にもなってきた。しかし躓きの石は、クレオール語が、フランス文部省によって、CAPES (=Certificat d'Aptitude Pédagogique à l'Enseignement Secondaire, 中等教育教員資格免状, カペス) のコースの一つとして認定され、その審査委員を選定する段になって、露呈した。「大同小異」を主張してきたマルチニックのクレオリストたちは審査委員に自分たちの代表が多数を占めるのが当然だとしたのに対し、文部省筋に近いフランス本国のクレオリストたち(シヨダンソン氏を含むインド洋のフランス語系クレオール語の専門家た

ち)は「口頭試問を含む審査では、インド洋のクレオール語の審査にカリブ海のクレオリストたちが口を挟む余地はない」として、あるレベルまでの親縁性は認めつつも、クレオール語の複数性を主張したのである。もともとクレオール語擁護運動は中央に対する地方の権利(「独自性」「文化的アイデンティティー」)の主張、(奴隷制にさかのぼる植民地時代の)歴史認識の是正と謝罪・名誉回復といった政治的なバイアスがかかったものであることから、事は単純にはおさまらない。カペスのクレオール語コースが認可された春にたまたまマルチニックのアンティル＝ギアナ大学のキャンパスにいた筆者は、共同研究室でシャンペンが抜かれ、祝杯があげられたのを知っている。しかしその翌年には同じ研究室で審査委員の構成をめぐって「中央政府の決定は容認し難い」というチラシが配られるありさまであった。その後、論争はレユニオンのクレオール語に詳しいショダンソンとマルチニックのコンフィアンジとの間の激しい個人攻撃にまで発展し、前者が後者を名誉毀損で訴えるというところまでエスカレートした⁽²⁾。この問題についても深入りする余裕はないが、問題のクレオール諸語が相互にどの程度親縁性があるものなのかは、以下に素描される各言語の「姿」から、本稿の読者がそれぞれに判断すべきものと考えている。

本稿で扱うのはカリブ海のマルチニックとハイチ、インド洋のレユニオンとモーリシャスのフランス語系クレオール(諸)語である。フランス語系クレオール(諸)語が話されているところは、この他に、カリブ海ではグアドループ、ドミニカ国⁽³⁾、セントルシア、トリニダード、インド洋ではセーシェル諸島、それに大陸部として、南米の仏領ギアナなどが数えられる。以上に列挙したうちハイチ、ドミニカ国、セントルシア、トリニダード・トバゴ、モーリシャス、セーシェル諸島は独立国(ハイチを除く他はすべて英連邦メンバー国で元は英領)で、マルチニック、グアドループ、レユニオン、および南米ギアナは、1946年以降、フランスの海外県になっている。これらの地域について、クレオール話者の数を大まかに知るために、人口を見てみると、最も多いのがハイチ(765万)、つづいてモーリシャス(122万)、トリニダード・トバゴ(109万)、レユニオン(76万)、グアドループ(44万)、マルチニック(39万)、仏領ギアナ(18万)、セントルシア(16万)、セーシェル諸島(8万)、ドミニカ国(7万)の順になる。これを単純に足すと約1200万人になるが、トリニダード・トバゴや仏領ギアナではフランス語系クレオール語は衰退しているので、その分120万人ほどを差し引くと、世界でフランス語系クレオール(諸)語を話している人口はおよそ1080万人、このうちハイチ共和国が約760万人なので、残りの320万人がカリブ海とインド洋の島々の話者であることがわかる。これを今少し別の観点から整理すると、クレ

オール語を国語として認定しているのはハイチ共和国だけで、それ以外のところは、英語あるいは仏語を公用語ないし国語と制定し、クレオール語は話し言葉として使われているというのが実状である。話者人口が二番目に多いモーリシャス共和国の運動家はただちに国語としてのステイタスは望まないものの、呼称として、自分たちが使っている言葉を「クレオール語」といわずに、「モーリシャス語」le mauricien と呼ぼうと提案している。こういうスタンスは政治的に独立しているから取れるもので、フランス共和国の海外県というステイタスの縛りがある島々では必ずしも容易ではないし、得策でもないだろう。それは「クレオール」というコンセプトが、狭義の地域的制約の桎梏から解放されて、人類史の大きな歴史的展望において自らを再定義し、民族移動・文化混交・文明伝播という普遍的ダイナミズムと関連付けることによって、世界的に受容されたこととも深く関わっている。

最後に「話し言葉」としてのクレオール語について一言述べておきたい。文字の発明は人類の進化に偉大な貢献をしたことは誰も認めるところであろうが、その一方で、文字に封じこめることによって、音声言語の微妙な味わいが失われることもたしかであろう。田中克彦氏は、クレオール語は「文字のさかしらによる加工のくわわらない、ほんもののことばである」⁽⁴⁾ といっている。その一事を忘れてクレオール語を云々することをいましめている。しかしたしかにそういう側面はあるにしても、現代のクレオール語擁護運動はすべて文字化をめざし、文字化した上で、詩や散文による文学表現を開拓しようとしている。そして外から見ている人間が接触し得るのは基本的に「書かれたクレオール語」である。「話し言葉」というものは、地域限定・時代限定の強いものであって、音声（音調）や語彙のわずかな（と外来者には思われる）違いにこだわりがある。外来者が物真似よろしく口にしても、てんから相手にされない。それは強い「内／外」意識に支配されたことばである。1996年の8月に初めてカリブ海を訪れ、グアドループ島でクレオリストのシルヴィア・ヌ・テルシッドに会ったときのことを思い出す。それは「Tchoup! (Djoup!)」というクレオール語の擬態語（刃物で「グサッ」と刺す）の音声的な特色についてのコメントである。音声をカタカナで表せば「チュップ!」であるが、彼女は口をすばめて、真っ白な前歯の間に唾を溜めて、パッと口を開く。こちらは唾を吐きかけられるのではないかと、思わず身構えるほどの迫力であったが、実際、どういう音なのか、初めて聞いた筆者にはいまひとつ不得要領であった。しかし、彼女によれば、それはきわめて特色的な重要な音なのである。辞去しながら、「話し言葉」というもののある種の《排他性》を思い知らされたような気がしたものである。

以上の前書きからお分かりいただけるように、表題に「管見」としたのは、遠眼鏡の筒を通して覗き見るようにしか対象(フランス語系クレオール(諸)語)を見ることができない筆者の立場を予めあきらかにしておきたいと思ったからである。

I フランス語系クレオール語の文法

以下にマルチニクのクレオール語の文法について大要を記す。ハイチ、レユニオン、モーリシャスのクレオール語とは、人称代名詞や動詞の時制の表し方などにおいて、異なるところが多少あるが、フランス語系クレオール語がどのようなことばであるかを知るためには、一つのクレオール語について、具体例に即して大要を把握することが有益であると思われるので、マルチニクのクレオール語をモデルに選んだ。

綴りと発音 近年まで話し言葉としてのみ使われてきたクレオール語を書き言葉として定着させるためには、まず、綴り字の規則を決めなくてはならない。言語にとって、音声は第一義的であり、初めて文字に写すときには、必ず論争が起こる。作家たちはそれぞれ工夫して、自分の体にしみこんだ原音を《忠実に》写そうとする傾向がある。ここではマルチニクのアンティル＝ギアナ大学のクレオール言語学の泰斗ジャン・ベルナベの率いる GEREC (=Groupe d'études et de recherches en espace créolophone クレオール語圏研究グループ) の綴り字規則に従って表記してある。

綴りと発音の関係については、要点を記すと、以下の通りである。①綴りはすべて発音される②母音は10個：a [a], i [i], é [e], è [ɛ], o [o], ô [ɔ], ou [u], en [ɛ̃], an [ɑ̃], on [ɔ̃] ③半母音は2個：y [j], w [w] ④子音はフランス語にあるものが17個、フランス語にないものが4個ある。クレオール語の単語を例に引いて後者のみを列挙すると、zing [zing] (英語の thing の -ing の発音と同じ), hak [hak] (英語の hand のように h を発音する), tjòk [tjɔk] (英語の child の ch の発音と同じ), djòk [djɔk] (英語の job の jo の発音と同じ)

I 名詞

名詞に性・数の区別はない。冠詞は以下のように表現される。

- a) 定冠詞：la (子音字のあと) または a (母音字のあと) で表され、ハイフンを付けて名詞の後ろに置かれる。例 boug-la その男, そいつ loto-a その車 (*鼻音の後では lan, an と形が変わる：fanm-lan その女性 sitwon-an そのレモン)

複数形は sé...-la または sé...-a で表す。例 sé bèf-la それらの牛 sé soulyé-a それらの靴 sé moun-lan それらの人々 sé jaden-an それらの庭

b) 不定冠詞：an で表され、名詞の前に置かれる。

an boug ある男, ある奴 an madanm ある女性 an jou ある日 an liv ある (一冊の) 本 an péyi ある国 (*複数の不定冠詞は時に dé [二つという意味もある] が使われるが, 一般には複数の不特定名詞には冠詞を付けない)

II 人称代名詞

	単数	複数
1 人称	man	nou
2 人称	ou (母音のあと:w)	zòt
3 人称	i (母音のあと:y)	yo

* man, ou, i にはそれぞれ強勢形 mwen, wou, li がある。

* 3 人称は男性, 女性の区別なく同じ形を用いる。

* 目的補語には, mwen, ou ('w), li (y), nou, zòt, yo を使う。

III 動詞

動詞に活用変化はない。時制は以下のように表現される。

a) 現在：動詞の前に ka をつけて表す。例 man ka chanté 私は歌う, 歌っている nou ka sòti lékòl 我々は学校から帰る (の外に出る) ところだ

* 但し enmen (=aimer), konnèt (=connaître), pé (=pouvoir), lé (=vouloir), dwèt (=devoir) などは ka を付けずにそのままの形で現在を表す。

b) 過去：頭に何も付けない動詞は一般に過去 (フランス語の複合過去, 単純過去に相当) を表す。例 yo pati 彼 (女) らは出発した man wè'y 私は彼 (女) を見た i ba mwen lajan 彼 (女) は私にお金をくれた sa ou fè? 元気? (*直訳すれば「君は何をしたのか?」となるが, フランス語の comment vas-tu? に相当する挨拶言葉)

* 過去の過去 (大過去) は動詞の前に té を付けて表す。例 i té chanté 彼 (女) はもう歌い終わっていた i té ja vini 彼 (女) はすでに来ていた

* 過去の持続行為 (半過去) は動詞の前に té ka を付けて表す。例 i té ka chanté 彼 (女) は歌っていた i té ka travay 彼 (女) は働いて (仕事をして) いた

c) 未来：動詞の前に ké をつけて表す。例 nou ké dòmi bonnè 我々は早寝をする

でしょう ké mantjé dlo 水不足になるでしょう

* 近未来表現は動詞の前に kay を付けて表す。例 ou kay travay 君はこれから仕事だ

* 条件法(現在と過去の区別はない)は動詞の前に té ké を付けて表す。例 yo té ké ja pati 彼(女)はもう出発しているだろう

N. B. (1) クレオール語では主語と属詞を結ぶ繫辞(フランス語の être に相当)は次の四つの形で表される。①形容詞や時・場所・様態などを表す言葉の前では省略される: Pyè kontan ピエールは満足だ i katrè 4 時だ i la 彼(女)はそこにいる man byen 私は大丈夫だ ②名詞の前では sé で表されることがある: ou sé an nonm 君は男だ péyi mwen sé Matnik 私の郷里はマルチニクです ③疑問文では yé で表されることがある: koté i yé? 彼はどこにいるの ki moun ou yé? 君は誰ですか ④フランス語の影響で èt (être から派生)で表されることがある i lé èt an bon dòktè 彼は立派な医者になりたい (2) クレオール語では動詞を並置して新しい意味を創出する語法が発達している: mennen alé 連れて行く (= emmener), mennen vini 連れて来る (= amener), pòté alé 持って行く (= emporter), pòté vini 持って来る (= apporter)

IV 否定と疑問

否定は動詞の前に pa を付けて表す。例 i pa ni lajan 彼(女)はお金をもっていない pa ni pwoblèm 問題ない ki yo lé, ki yo pas lé 彼らが望もうと、望まなかろうと、彼らの意志にかかわらず

疑問はイントネーションで表す以外に文頭に ès (フランス語の est-ce que に相当)を付けて表す。例 ès i fè sa 彼(女)はそんなことをしたのか? ès ou konprann sa man di'w la? 君は僕が言ったことを理解したのか? man ka mandé'w ès yo ja rivé 彼(女)らはもう着いたのかしら? (*直訳すれば「君にお尋ねしますが…」)

* 主な疑問詞は以下の通り: だれ? ki moun, ki moun sa, kilès なに? kisa, ki bagay どんな? ki, ki...sa, kilès どれ、どちら? kilès, kilès sa どこ? koté, ki koté, la, oti, éti どんなふうに? ki mannyè, koumannyè, kouman なぜ? poutji, poukisa いつ? ki tan, ki jou

例 ki moun ki fè sa? こんなことをしたのは誰だ? ay gadé sé kilès moun 誰だか見てきて (ki) sa sa yé sa? 何なの、それ kisa ou voyé? 何を送ったの ki boug ésa? どんな人なの kilès boutik sa? どんなお店なの kilès sa ki ta'w?

どれが君のですか la ou lé alé? 君はどこへ行きたいの koté ou yé? 君はどこにいるの ki mannyè ou yé? 元気ですか poutji ou pa vini épi mwen? どうして君は私と一緒に来なかったの? dépi ki tan ou la? 何時から君はそこにいるの ki jou ou ké rivé? 君は何日に着く予定ですか

V 関係詞

先行詞が主語の場合は ki で表す: sé Pyè ki vòlè bèf-la その牛を盗んだのはピエールだ

先行詞が補語の場合は関係詞を使わない: sé bèf-la Pyè vòlè, sé pa mouton-an ピエールが盗んだのは牛で、羊ではない (*先行詞に定冠詞が付いている場合、関係節の末尾に定冠詞 (la または a) を繰り返す: boug-la ki ka rété Fòdfrans la フォール・ド・フランスに住んでいるその男 fi-a man wè a 私が見たその少女)

N.B. sa ki... はフランス語の celui (celle, ceux, celles) qui... を表すと同時に、文脈によっては ce qui... の意味にもなる: man konnèt tou sa ki té la 私はそこにいた人をみんな知っている man pa sav sa ki rivé'y 私には彼(女)に何が起こったのか分からない

VI 比較の表現

優等比較は plis...ki, pli...ki..., pasé, 同等比較は osi...ki, otan...otan, 劣等比較は mwen...ki, mwens...ki で表す。例 Pyè pli mègzo ki Wòbè/Pyè mègzo plis ki Wòbè ピエールはロベールより痩せている Pyè dyézè pasé Wòbè ピエールはロベールより優雅だ Pyè osi gwo ki Wòbè piti ピエールが大きいだけ、ロベールは小さい Pyè mwen gran ki Wòbè ピエールはロベールより背が高くない

最上級は一般に pli, mwen と定冠詞(名詞の後に置く)とで表す。例 boug pli séryé a 一番真面目な奴 boug mwen gwo a 一番太ってない奴 (*この他, lé pli vayan 一番勇気のあるものたち, のようにフランス語にならった言い方も存在する)

VII 前置詞

フランス語で所属・様態・場所などを示す à や de は省略されることが多い: man ba Pyè lajan 私はピエールに金をやる man ka alé lanmès 私はミサに行く joujou timanmay-la その子の玩具 i bouzwen dòmi 彼(女)は眠る必要がある

時刻や様態を示すのに a, di (フランス語の à, de に相当) を付けて表すときもあ

る：vini a katrè 4時に来てよ mi boug a chapo a ほら帽子をかぶった奴が来たぞ
 その他クレオール語で使われる主な前置詞：① pou (=pour) フランス語のように
 後ろに動詞を置くこともできるが、節を従えて、pour que, afin que の意味でも使う
 ② ba (=au profit de, dans l'intérêt de, …のために)：man ké fè tou sa man pé
 ba'w 私は君のためにできるだけのことをするつもりだ ③ koté, o, oti, pabò, pa
 koté (=vers) 時間的・空間的に「…の方に」「…時頃に」の意で使う ④ an, adan,
 nan, ann, andidan (=en, dans) 場所について使う：ann Italie イタリアで andidan
 kay-la 家の中で ⑤ kay, lakay, akay, éti (=chez)：kay manman 母の家 i ka alé
 éti manman'y 彼(女)は母親の家に行く ⑥ kont (=contre) ⑦ épi (=avec,
 envers) ⑧ apré (=après) ⑨ avan (=avant) ⑩ dépi (=depuis, dès) ⑪ dèyè
 (=derrière) ⑫ ant (=entre) ⑬ adan (=parmi) ⑭ déwò (=hors) ⑮ jik (=
 jusque) ⑯ magré (=malgré) ⑰ san (=sans) ⑱ silon (=selon) ⑲ anba (=
 sous) ⑳ anlè, asou (=sur)⁽⁵⁾

II ハイチ、レユニオン、モーリシャスのクレオール語の 人称代名詞と動詞の時制の表現⁽⁶⁾

(1) ハイチ：

	単数	複数
1 人称	m, mwen	n, nou
2 人称	ou, w	n, nou
3 人称	li, l	y, yo

* ap+動詞で現在および現在進行形を表す。

M ap manje. (Je suis en train de manger.) 私は食べているところ(食事中)だ。

Ou ap monté ri sa a. (Tu montes cette rue-là.) 君はあの道を上っていくところだ。

* te+動詞で過去を表す。

Ki kote ou te fèt? (Quel côté tu as-été fait? Où es-tu né?) 君はどこで生まれたの?

Mwen te bay yo yon ti egzamen kalkil (Je leur ai donné un petit problème de calcul) 私は彼らにちょっとした計算問題を与えた。

* 未来の表現は pral+動詞で表す。近接未来表現は ap+動詞でも表す。

Bèl lapli pral tonbé. (Une belle pluie va tomber.) 大雨が降ってきそうだ。

(2) レユニオン：

	単数	複数
1 人称	moin, mi	nou
2 人称	ou	zot
3 人称	lī	banna

* 現在の表現には他のクレオール語に見られるような助詞は使われない。

Mi koz kréol. (Je parle créole.) 私はクレオール語を話す。

Mi konpran pas. (Je ne comprends pas.) (私には) 分かりません。

Volkan i koul. (Le volcan coule. Le volcan est en éruption.) 火山が噴火している。

(動詞 (koul) の前の i (=y) は「そこに、そこで」という場所の副詞が元になっているが、動詞で表わされている運動が現在進行中であることを強調するマーカーの役割を果たしている。)

* 過去は動詞の末尾に é を付けて表す。

Kossa la arivé (Quoi est arrivé? Qu'est-ce qui est arrivé? Que s'est-il passé?) 何が起こったのか?

* 未来は動詞の前に va を付けて表す。

Sépa kanssa nou va ariv lotel astër! (Je ne sais pas quand nous arriverons à l'hôtel à présent! Je me demande maintenant quand nous arriverons à l'hôtel.) もはや我々がいつホテルに着くか分からない。

(3) モーリシャス：

	単数	複数
1 人称	mo	nou
2 人称	to	ou, zot
3 人称	li	zot, bann-la

* pé (apé) + 動詞で現在および現在進行形を表す。ハイチのクレオール語と似ている。

Mo pé manzé. Mo apé manzé. (être après à faire qc = être en train de faire qc)

私は食べているところ(食事中)だ。

* 過去は、フランス語の単純過去に相当する「現在の状態と切れた」過去の行為の表現には ti+動詞, 「現在の状態とつながった」過去の表現(複合過去に相当)には finn+動詞を使う。

Mo ti vini yer. (Je suis venu hier, sous-entendu: «il est reparti, il n'est plus là».)
昨日来てみました。

Mo finn vini yer. (Je suis venu hier, sous-entendu: «je suis toujours là depuis».)
昨日から(ずっと)来ています。

* 未来の表現は pou (pu と綴る)+動詞を使う。

Mo pou vini démen. (Je suis pour venir demain, je viendrai demain.) 明日参ります。

*
* *

フランス語系クレオール語諸語の簡単な比較:「愛してるよ」というのをそれぞれの言葉でどのような言い方をするか。

Mwen renmen w pase de je nan tèt mwen. (ハイチ)

(仏語なら Je t'aime plus que deux yeux dans ma tête, plus que mes deux yeux.)
自分の二つの目より愛してるよ(単に「I love you」というのであれば, Mwen renmen w ですむので, 次のマルチニックの言い方とほぼ同じ)。

Mwen enmen'w. (マルチニック)

(Je t'aime.) 愛してるよ

Mi vè inn ti zafer ek ou? (レユニオン)

(Je veux un petit quelque chose avec toi?)

君とちょっとしたことがある(婉曲的な言い方)。

Ou vè kok ek moin? (レユニオン)

(Tu veux coucher (frapper, faire l'amour) avec moi?)

僕と寝ない?(直接的な言い方)

Mo kontan twa/ou. (モーリシャス)

(Je t'aime, je vous aime.)

好きだよ, 愛してるよ(仏語の形容詞 content が動詞になっている)。

To manyer al dan mwa. (モーリシャス)

(Tes manières vont dans moi. / Tes manières me conviennent.)

君の仕草（態度）が気に入った（婉曲的な言い方）。

Mo'nn trouv Pierre ek so trannsenk (ek son diset). (モーリシャス)

(J'ai vu Pierre avec sa petite amie.)

僕はピエールが恋人と一緒にいるところを見た。

* モーリシャス語には数字に特殊な意味を持たせた言いまわしがある。「35」(trannsenk, 仏語の trente cinq に相当) は「恋人」の意味。因みに kat (仏 quatre) 「4」は死を, sis (仏 six) 「6」は同性愛を意味するという。ヨーロッパに留学してきて、学生寮で、「6 号室」とか、「66 号室」とかを割り当てられると、モーリシャス出身の学生は困惑するという。

III クレオール語文芸 (Lettres créoles) 振興のための作家たちの試み

- (1) ハイチ：フランケチエンヌ Frankétienne (1936-) の小説『デザフィ』 *Dézaïfi* (1975) から⁽⁷⁾。

Branch boua makònin lan fon youn vié lakou koté vivan dé pié pasé raman. Youn ponyin sèl kòmansé fonn lan youn bonm dlo cho. Youn bonm dégradé, kolboso toupatou, noua anba kouch lafimin. Lan mitan youn boukan difé, youn latriyé grinn sèl tanmin pété. Lavi ak lanmo pa janm, sispann troké kòn.

Dòmi lèvé gadé maché manjé lanbé taté soufflé tonbé kouri ralé jounin grangou. Palé dépalé. Lang lou. Lang koupé miyèt-moso. Vant plin. Trip kòdé. Souaf dlo. Abiyé banda. Kouché mòksis. Lèvé kontan. Griyin dan. Pronminnin toutouni. Vlopé lan ranyon. Gayé nan lanmou. Anfourayé nan lanmò. Kilès pami nou k-ap viv toutbon? Kilès?

語彙：boua=bois, 木 makònin 繁茂する vié=vieux, 古い fon=fond, 奥 lakou=cour, 中庭 koté=où, そこでは〈関係詞〉 vivan dé pié=vivant à deux pieds 二本足の生き物, 人間 raman=rarement, めったに youn ponyin=une poignée (de), 一握り (の) fonn=fondre, 溶ける bonm=bouilloire, やかん, 湯沸し kolboso=cabossé へこんだ noua=noir, 黒い lafimin 煤 latriyé 大量 grinn=graine, 粒 tanmin (….) し始める lanvi=la vie, 生 ak=avec, と一緒に (前置詞) lanmou=l'amour, 愛 lanmo=la mort, 死 pa janm=pas

jamais, 決して…ない **sispann**=suspendre, 停止する **troké**=troquer, 交換する **kòn**=corne, 角 **dòmi**=dormir, 眠る **gadé**=regarder, 見る **maché**=marcher, 歩く **lanbé**=déguster lentement ゆっくり味わう, 舐める **ralé**=tirer, 引っ張る **jounin**=jeûner, 絶食する **grangou**=(en) plein jour, まっぴるま **vant**=ventre, 腹 **trip**=tripe, 胃腸, はらわた **kòdé**=corder, (縄などを) なう, よりあわす **banda** 優雅に, エレガントに **moksis** 気分を害した **griyin dan** 笑う (**dan**=dent, 歯) **ni**=nu, 裸の **ranyon**=haillons, ぼろ, 襤褸 **gayé**=s'égailler, s'éparpiller, 四散する, ちりじりになる **anfourayé** 足をとられる, 身を滅ぼされる **kilès**=qui, 誰

* 参照したハイチ・クレオール語の辞書: Féquière Vilsaint, *Diksyone Kreyol/Angle*, Educa Vision (USA, Florida), 1991

訳: 繁茂する木々の枝が古い中庭の奥にさしかかっている。中庭にはめったに人影がない。一握りの塩がやかんの煮えたぎる湯の中で溶け始めている。古ぼけて, あちこちへこんだ, 底が煤で黒ずんだやかん。燃えている木の中で, 数え切れない塩の粒がばちばちはねている。生と死は果てしなく角をつきあわせている。

寝て起きて見て歩いて食べて味わって触って吹いて転んで駆けて日がな飢える。話して口からでまかせを言う。舌が重くなる。舌が切り刻まれる。腹がふくれ, はらわたがきりきりする。水が飲みたくなる。着飾る。気分を害して寝る。上機嫌で目覚める。歯をみせて笑う。真っ裸で散歩する。^{ぼろ}襤褸を身にまとう。女の尻を追いかける。死に足をとられる。誰がわれわれの中で本当に生きているのか? 誰が?

(2) レユニオン: アクセル・ゴーヴァン Axel Gauvin (1944-) の小説『三文字街』*Kartié twa let* (1980) より⁽⁸⁾。

Soman Lwiz la pa parey sé bann fanm tet fol i rod riyenk gom la bou zot livré d fanmi. El i koné Tisien, riyenk Tisien. Souvandéfwá, défé i mont dan son kor kank son bonnonm lé pa la. El i siport son maléré sor, el i sanplengn pa. S'i fé tro mal, kiswa la zourné, kiswa la nuit, el i trap dé pies lenz, el i savòn sa, el i frot sa si la ros-a-lavé, el i bros sa ek la saler, ek la raz, po abat lanvi, po tié lanvi par la fatig dan son kor. Bann fanm i amenn la vi, i rir kank zot i wa sa. Bann papang la té asper lé zour Lwiz osi va sanz manir, va les tout kiyer ni tir manzé dan son marmit.

Bann lang malfondé la i di :

—Ou i wa pa li po fané son lo en pé partou ?

—Provit i aret asé po mwen, Lwiz, i arvir po tak zot bous. Lwiz té sir Tisien té en bon mari, rézonab, vré travayer, el té sir li té gaspi pas son larzan, son sémans, el té sir li té ramenn tout po el menm : la pey son dé somenn travay, lamour li la ramas kenz zour kenz nuit.

語彙 : **soman**=seulement, ただ, でも **rod**=chercher, 探す **rienk**=rien que, …だけ **gom**=souiller, 汚す, 泥を塗る **souvandéfwa**=bien souvent, しばしば **défé**=feu, 火 **kank**=quand, …のとき (接続詞) **sor**=sort, destin, 運命, 定め **sanplengn**=s'en plaindre, …を嘆く, 憂える **kiswa**=que ce soit..., …であれ **trap**=prendre, saisir, 捕まえる, 取る **lenz**=linge, 洗濯物, (シーツやタオルなどの) 布類 **si**=sur, の上に (前置詞) **ek**=avec, と一緒に (前置詞) **saleu**=chaleur, 熱気, 熱情 **raz**=rage, 怒り, 憤激 **po**=pour, のために (前置詞) **tié**=tuer, 殺す, 封殺する **wa**=voir, 見る **papang**=femme de mauvaise vie, 身持ちの悪い女, ふしだらな女 **asper**=attendre, 待つ **sanz**=changer, 変える **manir**=manière, 仕草, 態度 **les**=laisser, 放置する, するがままにさせておく **kiyer**=cuillère, さじ, スプーン **ni**=venir, 来る **fané**=répandre, éparpiller, 撒き散らす, 散逸する **lo**=l'eau, 水 (*ここでは「精液」の意) **provit**=pourvu que..., …であるかぎり **arvir**=répondre, 答える, 応じる **tak**=fermer, 閉める, 閉じる **bous**=bouche, 口 **el té sir**=elle était sûre (que)…, 彼女は…であることを確信していた **somenm**=semaine, 週 **kenz**=quinze, 15

*参照したレユニオン語の辞書 : Alain Armand, *Dictionnaire Kréol Français*, Ocean Editions, 1987

訳 : しかし, ルイーズは家族手帳を汚すばかりの浮気な女ではなかった。彼女はティシアンのかことは分かっていた, 男はティシアンしか知らなかった。夫がいない間, しばしば, 欲望で体がうずくことがあった。彼女は自分の不運をこらえ, 不平は言わなかった。我慢できなくなると, 昼でも夜でも, 彼女は洗濯物を二つばかりもって, 石鹸をつけ, 洗い岩にこすりつけ, ごしごと, 憤懣をぶつけるように, 洗った。そうして体を疲れさせることで, 欲望の火を消そうとしたのだ。近所の女たちはそれをみて笑っていた。身持ちの悪い女たちはルイーズがいつ, 自分たちと同様, 身をもちくずし, だれかれかまわず鍋の中にスプーンをつっこんでくるのを許すようになるか楽しみに待っていた。

——「あんたは夫がそこいらじゅうに種を蒔いているのが分からないの」と口さがない女たちは言っていた。

——「私の分が残っているんだったら、いいの」と連中にそれ以上言わせないために、ルーズは応えたものだ。それに彼女はティシアンが働き者で、分別のある、よい夫であることを信じていた。夫はけして女に入れあげたり、お金をみさかいなく使ったりせず、二週間分の給料と二週間分の禁欲の結果を彼女のもとにそっくり持ってくるはずだった。

(3) モーリシャス：デヴ・ヴィラソミー Dev Virahsawmy (1942-) によるシェイクスピア作『ハムレット』の翻訳から⁽⁹⁾。

訳：

Hamlet : Viv ou aret viv, samem gran	生きるか、生きるのをやめるか、それが
kestion— Eski li meyer fer fas bann	問題だ— 幾多の不幸に立ちむかい、
maler, manz ar tourman, traka ek	すべてが消えるまで、苦悩と困難と困惑と
tourdisman ziska ki zot fonn. Ferm	闘い続けるのがいいのか。それとも目を
lizie, dormi— samem tou ; servi	閉じて、眠る— それだけのことだ；我らが
somey pou efas fristrasion, lapenn,	存在をおしつぶす欲求不満、苦難、悲惨の
bann mizer anvra ki kraz nou kor—	かずかずを解消するために眠りを利用
ki pli zoli ki sa ?	するのと— どちらがよいか？
Enn kout sek tou tingn. Ferm lizie,	思い切った一刺しですべてが消える。目を閉
dormi— Dormi e kikfwa reve. Ayaya !	じて、眠る— 時に、夢をみる。そうか！
Samem douk la. Ler lamor finn pran	それが問題なのか。死が訪れたあと、どんな
nou, ki kalite rev vinn fer nou	夢がやってくるのか？
letour ?	
Sa papa, ki veritab manzer krann.	それが父上、本当に悩ましいところ。
Akoz samem nou tini-tini mem	それだから、喉元をしめあげる苦痛を
Malgré ki toufann chom nou par	いつまでも甘受しつづけるのだ；
lagorz ;	
Nou manz nou margo, aksepte sou-	苦しい時を耐え、労苦を容認するのだ。
frans	
Kan li telman fasil tingn lalimier.	光を消すことがかくもたやすいことなのに

Kifer nou rinte, fer fas kriz lor kriz?	なぜ我らは労苦に耐え、次々と襲いかかる
Parski personn pa kone ki ena	危機に立ちむかうのか？ それは誰も地上の
Lot kote brizan lavi lor later ;	生の彼岸に何があるかを知らないからだ；
Tansion sap dan karay tom dan dife,	大鍋から火の中に落ちないように用心して、
Nou bos tait, pil anplas. Laverite	我らは重荷を背負って苦勞をしつづける。
Se ki nou krake. Plis nou reflesi	真実は恐くなったのだ。考えれば考える
Plis nou gagn tartrari e bann gran	ほど、熱が出てきて、諸々の大計画も
plan anpandan lor lakord.	宙吊りになってしまう。
Kisannla sa?	あれは誰だ？
Ofilia.— Prinses dan ou lapriyer	オフィーリア— お前の祈りの中で
Mazinn mo pese.	私の罪の許しを請うのを忘れないでくれ。

語彙：viv=vivre, 生きる aret=arrêter, ストップする, やめる meyer=meilleur, better, よりよい maler=malheur, 不幸 manz=lutter, fight, 戦う ar=avec, with, …と tourman 苦しみ traka=worry, problem, 心にかかること, 問題, 困難 ek=and, (接続詞) と tourdisman 困惑 ziska... まで ferm lizie 目を閉じる dormi 眠る somey=sommeil, 眠り efas=effacer, 消す lapenn=la peine, 苦痛, 苦しみ anvrak=an vrak, in bulk, 大量に, kraz=crush, écraser, おしつぶす zoli=joli, 美しい kout=coup, 一撃 sek=dry, sec, 一思いの, 思い切った tingu (火や明かりを) 消す kikfwa=quelquefois, sometimes, 時々 reve=rêver, 夢見る douk=hassle, problem, 苦闘, 困難なこと ler=while, …の間 lamor=la mort, 死 ki=(接続詞, 関係詞) that, which ; (疑問詞, 間投詞) what, which kalite=qualité, quality, 質 vinn=venir, 来る, やって来る fer=faire, する manzer krann 悩ませる, 気をもませる (krann=crâne, skull 頭蓋骨) tini=wait, hold out ; keep in place, 保持する toufann 嵐, ハリケーン chom=hold on, 続ける, 持続する lagorz=gorge, throat, 喉 margoz ずっと昔 ; 苦しかった時代 lalimier=lumière, light, 光 kifer=why, なぜ rinte=work hard, 汗水たらす, (奴隷のように) あくせく働く kriz lor kriz=crise sur crise, 危機から危機へと, 幾多の危機を ena=have, own, 所有する, 持つ lavi=la vie, 生, 人生 lor later=sur la terre, 地上で, この世で tansion 緊張 sap=fall, 落ちる karay=frying pan, フライパン, 大鍋 tom=tomber, fall, 落ちる, 落下する dife=du feu, 火 bos=hump, hunch, (荷を) 肩にかつぐ, かついで運ぶ ; (背中を) 丸める tait=tight, しっかりと, 強く pil=grind, crush, 臼を引く, 破碎する ; こつこつ働く anplas=as usual, いつものように laverite 真実 krake (恐れて) 謹歩する, 尻込みする plis...plis…すればするほど…となる gagn 得る, 獲得する ; (感情が人

を) 捕らえる **tarrtarri** (震えがくるほどの) 高熱 **anpandan** 宙吊りになった **lor lakord=**
 sur la corde, ロープ(綱)の上に **kisannla=who** (疑問詞), 誰 **lapriyer=prière**, 祈り
mazinn=think, imagine, remember, 考える, 想起する, 忘れない **pese=péché, sin**, 罪

*参照したモーリシャス語の辞書:

① *Diksyoner Kreol Angle*, Ledikasyon pu Travayer, Port-Louis (Republic of Mauritius), 2004

② Arnaud Carpooran, *Diksyoner morisien (Let a-e)*, Editions Bartholdi, Quatre Bornes (Ile Maurice), 2005

①は2004年度のUnesco International Literacy Prizeを受けている英語(公用語)との対応を基本とした辞書。②は説明もモーリシャス語でなされている「国語辞典」で、フランス語と英語の訳語が語末に付されている画期的な試みであるが、まだAからEまでしか収録されていないので、続刊が待たれる。

なお、この二つの辞書で *diksyoner* と *diksioner* との二通りの綴りになっているのは、モーリシャス語にはまだ正字法が確立していないことによる。

- (4) マルチニック: クレオール語表現の詩人として出発したモンショアシ Monchoashi (1949-) の『朝露大将』*Konpè Lawouzé* から。語彙は割愛して、ラファエル・コンフィアンの仏訳を併記しよう⁽¹⁰⁾。

[仏訳]

Lanné Lawouzé

L'Année de la rosée

Men, mi jou, jodi

Mais, nous voilà aujourd'hui,

anlè zèl lawouzé:

sur l'aile de la rosée:

an ti flannng syèl koumansè kléré

un petit pan de ciel a commencé à s'éclairer

kon on pwonmès an tyè tout travayé...

comme une promesse au cœur de tous les travailleurs...

Men rasin nasyon mwen maré

Mais les racines de mon peuple sont

nan zantray

amarrées aux entrailles

nonm épi fanm péyi mwen...

des hommes et des femmes de mon pays...

Nou ja ka pityé tè	Déjà nous fouaillons la terre ;
nou ka simen, nou ka wouzé.	nous semons, nous arrosons
Nou ni lespwa demen ké pli bèl.	Nous avons l'espoir de demain plus beau !

訳：

朝露の年

しかし、今日、ここにわれらがいる
朝露の翼の上に；
空の一角が白み始めた
すべての働く者たちの心に対する約束のように…
しかし、われらが人民の根は繋がれている
われらが国の男たち女たちの
はらわたに…
すでにわれらは大地に鋤を入れ、
種を蒔き、水を灌いでいる
われらはより美しい明日への希望を持っている！

おわりに

本稿は2006年2月22日（水）の一橋大学語学研究室の例会で、定年を迎える教員に与えられる機会に、いくつかの資料を配布し、口頭で発表したことに形を与えたものである。我が国では未開拓の分野でもあり、筆者自身の知識の蓄積も十分ではないので、辛抱強くお読みいただいた読者にも様々な疑問が残ることは想像に難くない。筆者の思い違いなどをも含めてご叱正いただければ幸甚である。

注

1. ジャン・ベルナベ、バトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアン著『クレオール性礼賛』*Eloge de la créolité*（邦訳、恒川邦夫『クレオール礼賛』、平凡社、1997）：「我々アンティルのクレオールは、したがって、二重の連帯感の保持者なのだ。——我々の

『アンティル性』に根ざした、文化の差異にとらわれない、我々の諸島のすべての住民とのアンティル的(地政学的な)連帯感。——我々の『クレオール性』に根ざした、我々と同じ人類学的親縁性に属するアフリカ、マスカレーニュ、アジア、ポリネシアのすべての住民とのクレオールの連帯感。」(邦訳書, p. 50)

2. レユニオン大学の紀要のショ・ダンソンの論文 *Le CAPES de créole (s) : approche linguistique et historique*, in *Etudes créoles*, vol. XXIV, n° 1-2001, L'Harmattan, pp. 37-79, 参照。
3. ハイチ共和国とイスパニョーラ島を分有するドミニカ共和国 *Republica dominicana* (スペイン語圏, 首都 Santo Domingo) と区別するためにマルチニックの北隣にあるこの旧英領の島は「ドミニカ国」*Commonwealth of Dominica* (英語圏, 首都 Roseau) と呼ばれる。
4. ロベール・ショ・ダンソン著『クレオール語』(白水社, クセジュ文庫, 糟谷啓介・田中克彦訳, 2000) 所収の「訳者あとがき」の冒頭に記されている言葉(訳書, p. 171)。
5. 以上のマルチニック・クレオールの紹介に関する参考文献は以下の通りである。
 Jean Bernabé, Pierre Pinalie, *Grammaire du Créole martiniquais*, L'Harmattan, 1999, Paris
 Jean Bernabé, *Grammaire créole, Fondas kréyol-la*, L'Harmattan, 1987, Paris
 Jean Bernabé, *Précis de syntaxe créole*, Ibis Rouge Editions, 2003, Martinique
 Raphaël Confiant, *La version créole*, Ibis Rouge Editions, 2001, Martinique
 R. Ludwig, D. Montbrand, H. Pouillet, S. Telchid, *Dictionnaire créole français*, Servedit/Editions Jasor, 1990, Paris
6. 以下に引用した例文は基本的にフランスで出版された Assimil のポケット版に依拠する。
 Le créole martiniquais de poche, Assimil, 2004
 Le créole haïtien de poche, Assimil, 2001
 Le créole mauricien de poche, Assimil, 2002
 Le créole réunionnais de poche, Assimil, 2004
7. 詩人・小説家・エッセイスト・画家・俳優という多くの顔を持ち、1999年に国際交流基金の招きで来日したフランケチエンヌについては、拙著『フランケチエンヌ——クレオールの挑戦』(現代企画室, 1999)を参照。なおここにその冒頭の数行を引用した小説『デザフィ』については、バトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアン共著の『クレオール文芸』*Lettres créoles—Tracées antillaises et continentales de la littérature 1635-1975*, Hatier, 1991 (邦訳, 西谷修訳, 平凡社)に次のような紹介がある。「(...)クレオール語表現文学が一種の自己回帰を実現し、授爵状を得たのは1975年になって、ハイチ・クレオール語で書かれた最初の小説『デザフィ』によってである。作者はフランケチエンヌという。これは革命だった。クレオール語の書き物が、一挙に、当時の世界文学の中で最も新しく、大胆で、才気に富んでいたもの、すなわちヌーヴォー・ロマンへ近づいたのである。」

なお『デザフィ』には筆者の知る限り、二種類のクレオール語版とフランス語版がある。本稿で引用したのは、1975年8月23日の日付が付されたハイチの首都ポール＝オ＝フランスの出版社 Fardin から出た初版本である。クレオール語版は2002年にフランスの Châteauneuf-le-Rouge にある出版社 Vents d'ailleurs から新装版が出されたが、活字の組

み方などレイアウト上の異同にとどまらないヴァリエント（異文）が本文に数多く見られる。一方、フランス語版は *Les Affres d'un défi*（直訳すると「ある挑戦の苦悶」）というタイトルで、1979年に著者自身の手で Imprimerie Henri Deschamps、という同じハイチの首都にある印刷所から出版されたが、こちらは原本の忠実なフランス語訳というより、かなり自由な書き込み、書き加えのある「翻案」まがいのものである。

8. アクセル・ゴーヴェンは自然科学部門のアグレジエ（中高等教育教授資格者）を持つ小説家で、レユニオン・クレオール語擁護運動に早くからたずさわってきた（*Du créole opprimé au créole libéré, Défense de la langue réunionnaise* [「抑圧されたクレオールから解放されたクレオールへ、レユニオン語擁護」], L'Harmattan, 1977）。筆者は中央大学のレユニオン島出身の外国人教師ミカエル・フェリエ氏の紹介で、2005年3月と12月に同島を訪れた際、話を聞くことができた。氏の作品の多くはフランス語で書かれているが、ここに引用した作品は1980年にパリの Editions du Seuil からフランス語で出版されている（*Quartier trois lettres*）ので、別にレユニオン・クレオール語版が存在するものと思われる。本稿の引用はラファエル・コンフィアンがクレオール語カベス受験者用に編集した *La Version créole*, Ibis rouge Editions, 2001 記載の例題に基づいている。なお「三文字街」というのは、Saint-Leu [サン＝ルー] という名前の高地に由来し、L. E. U. の三文字から成る界限（街）という意味である。
9. デヴ・ヴィラソミーは熱心なモーリシャス（・クレオール）語の擁護者であり、クレオール語での創作劇（『リ（彼）』 *Li*, 1972, 『トゥファン（嵐）』 *Toufann*, 1991）やシェイクスピア劇のモーリシャス語訳などの仕事がある。詳しくは小池理恵「Dev Virahsawmy と Mauritian Literature の誕生 — モーリシャスの言語事情と文学 —」（富士常葉大学研究紀要第3号, 2003年3月）参照。

なお以下に掲げたシェイクスピアの『ハムレット』からの引用は第3幕1場の有名な台詞「生きるか、死ぬか、それが問題だ」である。原作のモノローグとつきあわせてみると、台詞の骨子はモーリシャス語に移されているが、シェイクスピア特有の華麗な修辭の細部については省略されているのが分かる。したがって、これは翻訳というより、翻案に近い。モーリシャス語がシェイクスピアの台詞をそのまま引き写しにするにはまだ十分に成熟していないせいか、あるいは、演劇の台詞として、モーリシャス語の修辭や響きを尊重して、枝葉を刈り込んだせいか、理由は色々考えられるが、はっきりしたところは分からない。一般に話し言葉を書き言葉に「昇格」させ、文学語として確立しようとする際に、古典を翻訳して当該言語の表現力を「証明」しようとする試みがなされることは珍しくない。ラファエル・コンフィアンもかつてエメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』の冒頭の数十行をマルチニック・クレオール語に訳してみせた。

参考までに引用したハムレットの台詞の原文を掲げておく：

Hamlet: To be, or not to be, that is the question;
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing end them. To die, to sleep,
No more; and by a sleep to say we end
The heart-ache and the thousand natural shocks
That flesh is heir to, 'tis a consummation

Devoutly to be wished. To die, to sleep ;
 To sleep, perchance to dream. Ay there's the rub ;
 For in that sleep of death what dreams may come
 When we have shuffled off this mortal coil,
 Must give us pause. There's the respect
 That makes calamity of so long life,
 For who would bear the whips and scorns of time,
 The oppressor's wrong, the proud man's contumely,
 The pangs of disprized love, the law's delay,
 The insolence of office, and the spurns
 The patient merit of the unworthy takes,
 When he himself might his quietus make
 With a bare bodkin? Who would fardels bear,
 To grunt and sweat under a weary life,
 But that the dread of something after death,
 The undiscovered country, from whose bourn
 No traveler returns, puzzles the will
 And makes us rather bear those ills we have,
 Than fly to others that we know not of?
 Thus conscience does make cowards of us all,
 And thus the native hue of resolution
 Is sicklied o'er with the pale cast of thought,
 And enterprises of great pith and moment
 With this regard their currents turn awry,
 And lose the name of action. Soft you now,
 The fair Ophelia?—Nymph, in thy orisons
 Be all my sins remembered.

10. モンシヨアシの詳細については、『現代詩手帖』2004年8月号に掲載された拙稿「現代マルチニックの詩人モンシヨアシ」を参照。引用した詩はもともとマルチニックのクレオール語振興運動のグループとして知られた Grif an te (「大地に爪をたてよ [自分たちの土地をしっかりと握め]」) の刊行物の一つとして印刷された。筆者が所有するコピーの奥付には「GRIF AN TE liméwo 8 espésyal Novamn 1977 Matnik/Les Imprimeurs Libres, Paris Mai 1979」と記されている。コンフィアンの仏訳付きの紹介はフランスの雑誌『ヨーロッパ』*Europe* の1980年8月号の特集「マルチニック/グアドループの文学」からの引用である。